百々裏話（50）

おもて　あきら

【観世新九郎家伝書の中から（その三）】

宮増弥左衛門親賢（弥六親次）は小鼓観世流の始祖とされる名手で、彼の名で伝えられている伝書も多い。それだけに、新九郎家に宮増親賢関係の文書が存在するであろうことを初めから予想し、自筆書状二通の出現、殊後の画像の存在などによって、その期待はある程度かなえられたが、親賢自筆の伝書は残っていなかった。しかし、江戸初期の転写と見られる書状形式の短い伝書一通が存在していたので、今回はそれを紹介したい。

○天文十一年宮増弥左衛門親賢伝書

書状風に巻いた一通で、普通紙に比較的丁寧に書かれている。筆者不明ながら、江戸初期筆と見られる古写本。少々濁点が附され、終末部以外は無段落。書名・題名は無い。仮に右の如く呼んでおきたい。

一、ほうゑの舞・らん拍子のわかちめの事、地躰かわる事は候わねども、男女のかわりにて候。ほうゑの舞は男はかせ、乱拍子は女はかせなり。この二つの名につるて、おとこばかせと申候は、かしらつきいだすくらひにて候。女ばかせと申候は、心をゆふにもち候をおんなばかせと申候。ことに観世がかりのはやしは、つき出し候心と申候。是は我等がわたくしと申事にては候はず候。宗観入道御かき候物をもち申候内に候間、われら心中より不レ申候。

そうじて、乱拍子・ほうゑの舞にかぎらざる事にて候。能をはやし候に、男おんなのくらひ、かくのごとく御しあん不レ可然？残候也。たゞし、能のうちに、おとこばかせの内の女ばかせと申候。又おんなばかせの内の男ばかせと申候。うたひの□せしもじのくらひを心がけはやし申候。□にかぎらざる事にて候哉。

かしらのしたるく候て何かよく候はんずれども、ことにより、似合候事、前後左右を心がけ候。たとへば、庭の松枝葉を、すぐなるをちゞめ、ゆがみたるをのべはへため候。さぬみしかるべからず候。此松、おのづからわれとそだちさかゑ候ごとくなるべし。つゞみ能によりたくさんなるもよし。うつくしく、野ゝ宮・定家などのやうなる能に、あら〳〵とかどをあらせ、きよふめうにはやすべからず。かくのごとく、万の能御しあん可レ然候。立居にも心の内にしあん、哥人のうたをあんずるやうに、つねに心がけ肝要候。

かくはわれらも申候へども、ゆだんのみばかりにくらし申候。

五音三曲と申も、祝言は心もち其心、ゆうげんと申も其心、れんぼと申は恋の心、あひしうといふは其心、乱曲と云ふはたくさんにそのしなあるべく候。

古哥にいわく、

くれなゐのうす花ざくらほの〴〵と
朝日いさよふをはつせのやま

この、哥うすざくらと申候詞はきらふことばにて候へ共、おきやうきどくとさたせられ候。かくのごとく、此つゞみの手も、おきやうにより可レ然候哉。

中比、あにこにて候弥七、今春弥次郎などの、此げひをしつくし、いさうなどをもきよふにまかせ、あられぬ事のみせじやうにわめかし申候。とうだひは大事の時分にて候。たゞよこしまなる事なかれ。手のまへあしのふみ所と、しなをあらわし候物にて候程に、そのたしなみあるべく候哉。されば、男女の心、かくのごとくに候はん哉。

一、ならひに中だうを心がけ候事、肝要にて候。ならひをしすごし候はへたのくらひたるべし。たとへば、かるきことをしりたるよしにて、あまりに其心候へば、はやくしづかなる事とばかりおもゑばたるむ。又はつくり物

などいでぬさまは手をもうたぬなどゝ、われこそしりたるよと、あまりに心もあらはすもわるく候。ならひを心ゑすごす事、中だうにはづれ申候か。げいをいさうにする事、しかるべからず。たくさんなるといさうがにたる物にて候。ことによりたくさんには可ゝ然候。あまりに入ほがなるもわるく候。百千申候も一二つ申候も、心中のたしなみ肝要候哉。

ふるき人の申候を、御とうかんなくうけ給り候間、あらかた書しるし申候。

天文十一年極月十日

観世九郎殿參　宮増弥左衛門親賢（花押）

あて名の観世九郎（豊次）は、親賢の高弟で小鼓観世流二代目となった観世彦右衛門宗拶の初名である。伝来の素姓がいい本であり、奥書のままに親賢の伝書と認めてよいものであろう。虫損のため不分明な点（傍線部）があり、また行文の整わない感があって、転写の際の誤写、誤脱を生じているらしいが、法会の舞（翁の特殊演出）と乱拍子の相違の説明から男博士・女博士の事に及び、いささか余事にも及んだ前段と、習いについての中道を説いた後段とから成り、他の宮増伝書に見えない記事のように思う。しかし、それが宮増親賢自身の説であることは疑いないようで、特に後段の中道論は、親賢が他書に中道を知った役者として評価されているのと符合している。即ち、徳川宗賢氏蔵の『観世与左衛門国広伝書』（天正六年観世又三郎あて奥書）に、

一、紫野の東漢和尚、禅に中道が面白事也と宗遍に被ゝ仰候処に、宗拶御返事申上候。宮増弥左衛門と我等ならでは中道を存たる者無ゝ之候。然共、弥左衛門は生徳中道を生つきたる者候間、人の役にはたゝず候。我等は、名人に相尋、執心の功を以打覚たる役人に候間、人の用に立申候由申上候。近比面白事也。

とあって、宮増とほぼ同代の観世座の太鼓役人であった観世次郎大夫国忠（法名宗撾）が、宮増を生得に中道を身につけた役者として評価しているのである。日頃宮増が中道を口にしていたための評価なのであろう。

なお、この中道なる考え方は、東漢和尚も言う如く禅の方で重視されていたのに由来するのであろうが、金春禅鳳の伝書にもその思想が見えており、宮増の場合は禅鳳の影響があるのではなかろうか。彼はもと金春座に属し、後に観世座に移った役人であり、右の伝書の中にも、庭の松の例えや五音三曲の事を言い出すあたりに、金春座の所説の影響が認められる。前段に言及している兄の弥七（宮増弥七。小鼓の名手）や金春弥次郎（父禅徳も禅珍であろう）も金春座の嫡子方である。

また前段に宗観（観世与四郎。信光の兄。太鼓・小鼓の名人）書物のことが見えるが、観世宗家蔵の、各種の音曲伝書の合写本たる『五音三曲』（室町末期筆）の中に、永正十六年（一五一九）三月に大蔵九郎能氏（観世座大鼓方）が大蔵与三郎久氏に与えた伝書が合写されており、その一部が「長享三年、（一四八九）三月十三日　宗観在判」とある鼓伝書であるが、短いにもかかわらず男博士・女博士の説が特色的に存在しており、右の伝書の説とほぼ合致している。両書がたがいにその素姓の正しさ、信頼度の高さを証し合っているものと言えよう。

荒々しく異相なことを意味するらしい「きようめう」の語（禅竹伝書に用例がある）の使用など、用語にも古色が存するし、『先達物語』や『初学一葉』等の歌書に見える家隆の「くれなゐの……」の歌の話が引かれている点も、茶人として風雅の人とまじわりの多かった親賢に適わしい。右の書が親賢の確かな伝書であることは間違いないと信ずる。

因みに、天文十一年（一五四二）には宮増親賢は60歳前後、相伝を受けた観世九郎豊次は18歳であった。豊次が当時既に親賢に師事していたことを示す資料としても評価できる伝書である。

（42・8・18）

百々裏話（既載分）目録

＊回数・題名・錬仙号数・年月の順

①翁。嵐山。葛城。46（32・1）
②忠度。弱法師。47（32・2）
③熊野。野守。48（32・3）
④蟻通。49（32・4）
⑤清経。当麻。50（32・5）
⑥三井寺。51（32・6）
⑦花伝私注その一　風流。52（32・9）
⑧〃　その二　六十六番申楽　53（32・10）
⑨〃　その三　年来稽古。大場などの脇の申楽には立つべからず。54（32・11）
⑩〃　その四　かさは一さいにわたるぎ也。55（32・12）
⑪翁。蟬丸。56（33・1）
⑫田村。小塩。57（33・2）
⑬遊行柳。舟橋。58（33・3）
⑭俊寛。59（33・4）
⑮大原御幸。車僧。60（33・5）
⑯七小町のことなど。61（33・6）
⑰梅枝。63（33・10）
⑱班女。64（33・11）
⑲松風。65（33・12）
⑳花伝書と花の伝書と本木。66（34・1）
㉑世阿弥伝書の数と書名。109（38・4）
㉒世阿弥生年は貞治二年に非ず。110（38・5）
㉓風姿花伝と花伝書。111（38・6）
㉔風姿花伝の異本―元章注入本と田中本―　113（38・9）
㉕鴻山文庫本風姿花伝をめぐって。114（38・11）
㉖宝山寺文書について。117（39・2）
㉗観世の名称について。119（39・4）
㉘観世流という言い方について。120（39・5）
㉙観世（京）がかり・金春（大和）がかり。　121（39・6）
㉚上がかり・下がかり。124（39・1）
㉛謡曲作者付の色々―その一　元禄謡本作者付　126（40・1）
㉜〃―その二　謡指南作者付　127（40・2）
㉝〃　その三　前二本の考察　131（40・6）
㉞〃　その四　謡曲作者備考　132（40・7）
㉟〃　その五　金春作者付　133（40・9）
㊱宝山寺文書について。138（41・3）
㊲謡曲作者付の色々―その六　大蔵作者付　139（41・4）
㊳音曲（声出）口伝について。　140（41・5）
㊴音曲道歌雑考―その一。　141（41・6）
（1）三十首系道歌
㊵〃　その二　（1）の続き　142（41・7）
㊶〃　その三　（2）音阿弥百首系道歌　143（41・9）
㊷〃　その四　（2）の続き　144（41・11）
㊸〃　その五　（3）集鼓之和歌　145（41・12）
㊹〃　その六　（4）音韻・謡・鼓道歌　146（42・1）
㊺〃　その七　（4）の続き　147（42・2）
㊻〃　その八　（5）徳丸肥前高長道歌　148（42・4）
㊼〃　その九　（5）の続き　149（42・5）
㊽観世新九郎家伝書の中から―その一　観世大夫家と小鼓観世家の関係書付　150（42・6）
㊾〃　その二　151（42・7）
観世信光伝書「声ツカウ事」
㊿〃　その三　152（42・9）
天文十一年宮増弥左衛門親賢伝書。

【附記】

気息奄々、十年以上を費してようやく50回になりました。面白くもない拙文に誌面を提供して下さる編集部の方と、迷惑を耐えて下さる読者の方々にお礼申し上げます。時々、表題の由来を問われますが、第一回の翁の考察の中で、『法華五部九巻書序』の「百々」をトウトウと読むかドウドウと読むか詮索したことと、なるべく表立たぬことを書きたいという気持から「百々裏話」と題したものです。かって丸四年も休んだことがあり、これからも時々は休むかも知れませんが、もう少し続けさせていただきたいものと願っています。

（表　章）